

「わたしがあなたがたを選んだ」

ヨハネによる福音書 第15章 11節～17節

説教 岡村 恒牧師

「わたしがあなたがたを選んだ」(16節) 主イエス・キリストが十字架にお架かりになる前夜、不安と恐れの中にある弟子たちにお語りになった言葉です。

弟子たちは、主イエスによって選ばれた人々でした。漁師として網をつくらっている時に、あるいは取税人の仕事をしている最中に、主イエスによって召されて従いました。そしておそらく3年余り寝食を共にしてきました。主イエスのお言葉を聞き、多くの奇跡を目の当たりにしてきました。確かに、主に選ばれたのです。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」(15章5節)と主は言われて、どれほど深く弟子たちを愛し、この私たちを愛しておられるかを語られます。また、いよいよ十字架にお架かりになること、つまり〈別れ〉について語り始めながら、「これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。」(11節)と言われたのです。主イエスがここにおられなかったら、弟子たちには喜びなどありません。弟子たちのとまどいと不安は頂点に達します。

元々、この夜の食事は、いつもの〈過ぎ越しの祭り〉とは異なっていました。主イエスは晩餐の前に、弟子たちの足をお洗いになりました。当時、家の奴隷がする仕事でした。この夜、弟子たちがとまどう中、主イエスは、ご自身の愛について一直線にお話しになりました。足を洗うことから、ぶどうの枝の話を経て、命を捨てる愛の話へと続いていくのです。

「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」(13節)。これは世の中の人々に、よく知られた言葉です。しかしよく誤解されています。《キリスト教的な博愛、人類愛、兄弟愛を指さず言葉であって、自己犠牲を伴う他者への愛こそキリスト教の本質だ》というのがその誤解です。

主イエスがなさったのは、隣人愛の話ではありません。主は「もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。…わたしはあなたがたを友と呼ぶ。」(15節)と宣言されたのです。元の言葉では、〈あなたがたは、友だ、私の〉という順番で記されています。「友のために命を捨てる」愛の大きさに目を向けさせた直後に、〈あなたは友だ、このわたしの〉と宣言されたのです。

主イエスはこの最後の夜に、少しも寄り道をしないで、ご自分が注ぎ出して下さる愛を明らかにされました。私たちにはとうてい理解できない理不尽な愛です。私たちには、このように愛される値打ちなどありません。繰り返し神にそむき、神を悲しませ、隣り人を傷つけ、神によって造られた世界を破壊して生きています。何よりも、神を神として崇めることも、この私のために命を捨ててまで愛し抜いて下さったお方を主として讃美することもしないで歩んで来たのです。

しかし主イエス・キリストは、神の計画についてお語りになりました。1節以下でぶどうの木と枝のたとえをお語りになった時、父なる神が〈農夫〉として手入れして下さると言われました。農夫が実を期待して手入れするように、父なる神が、私たちの実りに期待しておられるのです。神が私たちの実をご覧になって喜んで下さるのです。ぶどうの木に〈接ぎ木〉されるようにして、私たちが主イエスに結びつけられ、命を注ぎ入れられて生きる時、そこには枝の使命があります。実を結ぶようにと「任命」されたのです。神の深いご計画によって、豊かな命を生き、実を結ぶために、主イエスは私たちを選び、任命してお用い下さるのです。

今朝の聖書箇所には「とどまる(メネイン)」という言葉が繰り返し出てきます。「つながる」、「とどまる」、「残る」と訳されてる言葉です。主イエスが与えて下さる喜びは、やがて消え失せるようなものではなく私たちの内にとどまります。主イエスにつながって結ぶ実はいつまでも残る実です。主イエスに結びつけられて生かされる者は、変わることをない希望を抱いて歩むこととなります。

主イエスは、「わたしはあなたがたを友と呼ぶ。」(15節)と言われました。友のために命を捨て、命がけで友と呼んで下さるお方が、私たち一人一人を招いておられます。僕(しもべ)ではなく友として、自由な者として主イエスの招きに応えて生きる時、死から命に移され、変わることをない命が私たちを生かし、主イエスご自身の喜びが私たちからあふれ出て生きます。〈あなたはわたしの友だ〉と語りかけて下さるお方こそ、神のひとり子、私たちの救い主です。主の招きに応えて歩みましょう。

(記 岡村 恒)